

---

# ファンタジーワールド番外編 - 訳ありのお姉さんと僕 -

ビークル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンタジーワールド番外編 - 訳ありのお姉さんと僕 -

### 【Nコード】

N8741G

### 【作者名】

ビークル

### 【あらすじ】

マジメで人見知りで自分に自信がない少年はバスで出会った女性に何か惹かれていくが、そのお姉さんは訳ありで……。ファンタジーワールド - First Mission - の番外編！

## 第一話 お姉さんとの出会い

「……………て。 ……き……………て」

ん？ 僕を起こすのはだれ？

……………ねむい。

もうすこし寝かせてくれよ……………。

「……………き……………す……………よ。 ……や……………き……………て」

このぬくもりをもう少しかんじていたい。  
もう少しだけこのまま……………。

「もう少し待つて。 かあさん……………」

「え？ まだ寝ぼけてるの？ 早く起きなさい」

「……………zzzz」

「しょうがないわね」

頬に電撃が走る。

反射的に目が開き、緑と黒のコントラストが映る。

あれ？ 俺の部屋は白で、家具も木だから緑と黒なんておかしい。

「目が覚めた？」

真上から声が聞こえた。

あれ？　なんで誰かの声が聞こえるんだ？  
俺は一人暮らしだから、誰かに声をかけられることなんてないんだが……。

ゴシゴシと目をこする。

ポニユ

そんな効果音が聞こえてきそうな感触が右ひじで感じる。

バツと瞬間的に起き上がり、右を見てみる。

「……………」

「起きたのはいいけど、早く降りないと乗り過ごしちゃうわよ」

見知らぬ女性が座っていた。

いや、視界に映る人はその人だけじゃない。

声は発しないもののサラリーマン、学生、その他もろもろの人影が見える。

後ろを見てみると、窓がありそこに見覚えのある学校が見える。

……ここバスじゃん！　そしてもう目的地じゃん！

そこまで思考してから一つの事実気づく。

『この人にもたれて寝てた』

「わっ、ごめんなさいごめんなさいっ！！」

「い、いやそれは別にいいんだけど、早く行った方が……あっ」

女性の視線の先を追いかけてみると、ガチャッと音がして閉まるドアが見えた。

「……わっ、すみません！！ 僕降りまゝす！！」

これがお姉さんの出会いだった。

「いや、ホント昨日はすみません。もたれて寝た上に胸まで触ってしまつて……」

「そんなの気にしないでいいよ」

「いやでも……」

「もういいの。周りの人も見てるし、その話はやめて欲しいんだけど……」

「あ……、すみません」

周りを見ていると皆がこつちを見ている。

その中には僕と同じ制服を着ている人もいるし、ほぼ全員が昨日の一幕を見ているだろう。

それを意識したら、急にカーツと顔が熱くなる。

「……。っもう」

流石にご立腹のようだ。

やっぱり見知らぬ男に寄りかかれて、そのうえ胸まで触られたら怒るよな……。

それから僕が降りるまで終始無言だった。

「あのこれ、この前のお詫びというか……」

そういつてカバンから、綺麗にラッピングされたお菓子を出す。クッキーが入っているのだが、これなら嫌いとかなさそうだし。それにしてもあんなことがあっても、僕の隣に座り続けるんだ……。

いや、僕の隣以外は空いてないからなんだろうけど。

「え？ だから気にしてないわよ」

「いや、それでも……」

「受け取れません」

「それにお礼も含んでいゐるんです。あの時起こしてもらえなければ遅刻でしたし……」

……。

……。

……。

30秒くらいじっとお菓子を差し出し続けていたら、不意にお菓子をとられた。

「全く。強情な子ね」

そう言つて困つたように微笑んでくれた。

大人びいて見える彼女が、困つたようにする様子はちょっと新鮮に見えた。

女性にプレゼントなんて照れくさくつて、学校に着くまで窓の外を見ていた。

「クッキー、おいしかったわ。ありがとう」

「いえ、そんな。お礼を言うのはこつちですよ」

「ただ起こしてあげただけよ？」

「はい。それでも助かりました」

「そんなにあなたの学校って遅刻にうるさいの？」

「はい、学校は元々厳しいんですけど、僕は生徒会長っていうのもありますから……」

「キミが生徒会長？」

へえ、といいながら頭のとっぺんから足元見られる。  
女性にジロジロ見られるのって緊張する……。

「確かにマジメそうなんだけど……、もっと堂々としてた方がいいよ」

「堂々、ですか？」

「うん。確かにキミみたいなマジメな人が生徒会長っていうのは確かに安心なだけだね。」

でも頼りがいのある人が頂点にいたら、みんな信頼できるし」

「やっぱり僕は頼りがいがないですよね……」

「それがだめなの！ もっと胸はって、前見て、しっかりしなさい」



「はい…」

「返事もしつかり！」

「はいっ！」

そういわれると何か元気が出てきた。

確かに僕はお飾りの生徒会長だ。

生徒会長とは名ばかりで、生徒会の皆は僕の言うことを聞いてくれないし、全校集会も話し聞いてくれないし。

先生だって僕に相談するよりは、副生徒会長に相談するし、会議だって僕はあまりしゃべらない。

あだ名も苗字と名前の頭文字をとって、イマイチ君 って呼ばれるほどだ。

何故そんな僕が生徒会長になれたか、と聞かれれば、僕以外に候補がいなかったからとしか答えられない。

今日からはもうちょっとしつかりしてみよう。

その後は、どういう態度をすればしつかりした人に見えるかとか教えてもらったり、髪とか眉毛とかいじってもらった。

僕がバスに降りる時、「バイバイ。 また明日」と声をかけてくれた。

それが嬉しくて、「また明日」と笑顔で手を振った。

「昨日はお姉さんのおかげで、皆の態度が変わったんです。ありがとうございます」

「そう、役に立ててよかったわ。それよりお姉さんって？」

昨日はお姉さんの言うとおり、しっかり、堂々とした態度で集会に臨んだ。

『生徒会長の話』の時も、緊張したけどカンペ見ずに最後まで、つまりながらも言えた。

その間、誰もしゃべらない、とまでいなくても、ほとんどの人が話を聞いてくれた。

集会が終わった後、生徒会の子に「感じ変わったね」とか「今日の先輩格好よかったです」って言ってもらえたのが嬉しかった。これも全てお姉さんのおかげだ。

「え？　だめでした？」

「だめってことはないけど、私もうそんな年じゃないわよ？」

「え？　何歳なんですか？」

と反射的に聞いてから、しまった、と思った。

クラスとかで、誕生日が過ぎたかどうか、という意味で何歳って聞くことがあったからそれと同じ感じで聞いてしまった。

怒られるのと嫌悪されるのがいやで、すぐに謝った。

「あ、ごめん」いくつにみえる？」「なさい……え？」

「だから、いくつに見える?」

怒るでもなく、発せられる雰囲気と言葉はからかいを含んだ疑問だった。

「え、いくつに……って」

お姉さんを見てみる。

大人びいた顔や雰囲気、艶やかな髪、濃くない薄化粧。

何となく大学生に見えないけど、当然高校生にも見えない。そこでなぜか、学校にいる国語の新人女性教師を思い出す。

「24……、ぐらいですか?」

「え? もう一回言って?」

あれ? 間違ったかな? これで「私まだ大学生」って言われたら、失礼だったよね……。

でも、何となく合ってるような気がして、もう一度自信をもって言った。

「24ぐらいだと思います」

「嘘……じゃないよね?」

やっぱりもつと若いのかなあ。

「すみません。もっと若いですか？」

「……………」

黙りこんでしまった。

やっぱり失礼だったよなあ。

「ごめんなさい、やっぱりもっと若かったですよね……………」

「……………」

「やっぱり怒ってます？」

「ふえ？ い、いやそんなわけあるわけじゃないじゃない」

それから話しかけても反応が薄かった。

ちよつと顔も赤かったような気もするし、やっぱり女性なら実年齢より上に見られたら恥ずかしいのかな……………。

これからは年齢の話は禁句、と覚えておこう。

結局、別れの挨拶を言っても、軽く頷かれるだけだった。

「あれ？ 今日も学校？」

話しかけてきたのは今日は会うはずのない、お姉さんだった。

「あ、はい。お姉さんこそ、土曜日にもお仕事ですか？」

「うん、2日も休んだら生活が苦しくって」

そう言っただけで苦笑するお姉さん。

ふっふっふ、お姉さんは嫌をかけられたのを気づいていない。  
今日も仕事、ということはお姉さんは社会人ということだ。

「大学生でも働きながら通う人もいるよ」

「そうか、じゃあ今の質問は意味がなかったのか……ってあれ？」

「お姉さんを騙そうなんて百年早いわよ。キミの考えはお・み・  
と・お・し」

「ごめんなさいごめんなさい。どうしても知的好奇心が刺激されて  
しまっただけ……」

「うん、どうしようかな」

お、お姉さんが笑いながらこっちを見てる。  
僕は何をされるんだ？

「ごめんなさい。このとおりです」

そういつてひざにつくまで、頭を下げる。

座席に座りながらなので、結果的にお姉さんの方に向いてないが、誠意は分かってくれよう。

「あ、頭まで下げなくていいわよ。うーん、でもそうねえ……。素直に頭を下げたキミにはヒントをあげよう」

「え？ ホントですか？」

「昨日のキミの予想はおおハズレよ」

そう言つて、手を口にあててクスクスと笑う。

昨日の予想がおおハズレ？

じゃあ、やっぱりもっと若いのかなあ。19とか？

「年齢の話はこれでおしまい。土曜日の学校ってことは部活だね。何部？」

「卓球部です。まあ今日も普通に授業はありますがけど」

「え？ 授業あるの？」

「今時珍しいですよね。学校の方針で第2・4土曜日以外の土曜日にはあるんですよ」

「へ。 流石に遅刻に厳しいことはあれわね……」

「それは関係ないと思います」

今日はお互いに終始笑顔だった。  
こんな楽しい日が続けばいいな。

## 第二話 お姉さんとの別れ

「あれ？ 今日も学校？」

昨日と同じセリフでお姉さんが乗車してきた。

やはり1週間連続で会うつていうのもなんだか変だ。

いや、明日から月曜日で土曜日まで会うと思うから、ほぼ2週間会っ計算になる。

本当のことをいうか、嘘のことをいうか迷ったが……、いろいろしてくれるお姉さんに嘘をつくのは気が引けたので、本当のことを言う。

「いえ、学校ではないんですけど……………」

「？」

い、言にくい。

ものすごく恥ずかしくてつい、そっぽを向きながら、小声で嘆いてしまう。

なので、

「…………お姉さんに会いに」

「え？」

聞き逃されてしまった。

もう一度言うのか？ 僕にそんな勇気はないんだけど……。



残りかすのような勇気を体中から振り絞り、再び、しかし今度は聞こえるように言った。

「お姉さんに会いに来ましたっ！」

恥ずかしすぎて、お姉さんの顔を見なかったので、言った後再び窓の方を向いてしまう。

数秒は沈黙だったが、クスクスと笑い声に変わる。

「あら？ 私なんかに会いに来たの？」

「は、はい」

「私が来なかったら？」

「次のバス停で降りて帰ります」

「あらあら」

「えと、あの、その、なので今日はお姉さんが降りるところまで乗ってます」

「最後まで乗ってるわよ？」

「もちろん、大丈夫です」

そう言い切ると、またクスクスと笑われる。

何はともあれ、嫌がられるということはないようだ。

出会いが最悪だったため心配だったが、一安心だ。

そのまま、他愛の話をしていた。

「そろそろ終点ですね」

「この後はどうするの？」

「え〜と、帰ってたら勉強してると思います。」

学校でしゃべる友達はいても、遊ぶ友達はいませんか」

「え？ まさか本当に私に会いに来るために来たの？」

「信じてくれなかったんですか？」

「それはそうよ。 え〜、そうなんだ〜。 ちょっと嬉しいかな〜」

「ホントですかっ」

「そうね。 自分のために何かをしてくれる、っていうのは嬉しいものよ」

正面から笑顔で言われる。

バスの座席というのは広いようで狭いらしく、顔が至近距離にあり、かなり恥ずかしい。

それで僕は……、やっぱりそっぽを向いてしまっ。

「良かったら1時に改札で待ってて。 ご飯ご馳走するから」

「も……」

振り向きざまに「もちろん待ってます」と言おうとしたら、いつの間にか止まってたバスのドアからとっと出てしまっていた。とっとと出てしまったので、聞き間違いだったかも知れないけど、食事に誘われたのが嬉しくて、絶対に待ってよう、と思った。

「あ、お姉さん！」

駅前の喫茶店で宿題を終わらせたら、ちょうどいい時間だったので改札に行ってみるとすでにお姉さんがいた。

柱を背に、凜々しく待っている姿もやっぱり大人びいて格好いい。何となく、小走りでお姉さんのところへ向かう。

「待ちました？」

「常々（つねづね）思うけど、それって待っても待たなくても『今来たところ』って言わなきゃいけないのよね」

「正直に言ってもらっていいですよ？」

「仕事を早く終わらせようと思ったら、思ったより早く終わっちゃって30分前くらいに着いちゃった」

「えっ！ そんなに待たせちゃいました？」

「ふふふ、うそ」

「ええ、そんな」

「ふふ。ま、こんなとこで話すのもなんだから、移動しながら話しましょうか」

そう言っ、お姉さんが先行する。  
慌てて追いかけようとしたとき、

「でも早く仕事を終わらせたのは本当よ」  
と言われた気がした。

「みそ、しお、しょうゆ、どれがいい？」

「し、しおで」

「店主さん、しお2つ」

「はいよ！」

つれてこられたのは近くの裏路地にある小さなラーメン屋だった。  
今時、カウンター席だけのラーメン屋なんて珍しい。客はいない。  
それにしても、お姉さんがこういうところに来るなんて、少し新鮮だ。

いや、お姉さんのことはあまり知らないから、新鮮も何もなければいけないけど。

「お姉さんはよく来るんですか？」

「そうね、週に2回はここに来るわね。  
安いし、おいしいからね」

「へえ、いくらくらいなんですか？」

「一皿350円」

「や、安いですね」

価格高騰と言われる現代で、まず500円以内で食事を済ませられる店というのは存在しないと言っている。

まず、原価が高い。

価格高騰を受けていないのは日本では米だけなので、小麦を使うラーメンも例外ではない。

それに光熱や水道も近年は民営化した。

国で支えられなくなった結果なのだが、国の支えが完全になくなってしまったそれらは10年前の3倍以上と聞いている。

ましてや駅前の店だ。

土地も高かっただろうし、どうやって、やりくりしているんだろうか？

そう思つてるとお姉さんはムツとして、

「安いご飯で悪かったわね」

「い、いやそういう意味じゃ……」

怒らせてしまったか？　　と思いいしどろもどろに弁明しようとする  
と、今度はパツと笑顔になって、

「分かつてるわよ、冗談冗談。　　今日は私のおごりだし、味も私が  
保証するから安心して」

といわれる。

友達の冗談は口だけで表情までは変わらないので、冗談とすぐに  
分かる。

のだが、お姉さんの場合は表情まで変わるので、本気が冗談か全  
く判別がつかない。

あんまり一方的にからかわれるのはちょっと悔しいので、口を尖  
らせて、

「お姉さん、意地悪です」

「はいはい、お姉さんは意地悪ですよ」

そういったのに、笑顔で返されてしまった。

冗談だと分かっているようだ。

ちょっと悔しい。

「今日のお客さん、楽しそうですね」

おまちどう、といってラーメンを差し出してきたのは、先ほどの

店主さんだ。

どうやら、アルバイトを雇わずに経営することで、人件費がかかってないのが安い値段の原因か？

まあ、全部がそうでないのは分かるけど。

それはそうと、ラーメンの方は見た目、普通だ。

麺、つゆはもちろんのり、メンマ、チャーシューが少し入っている。

「やっぱりそう見える？」

いや、この子が可愛くって」

「か、可愛いって」

僕は男で、確かに格好いいと言われたことないけど、でもだからって、か、可愛いって……。

「まあ、お客さんにとっては可愛いんでしょうけどね。

あんまり年下いじめちゃいけませんよ」

「2人からしたら僕は可愛いんですか？」

「うん」

お姉さんに即答された。

まあ、お姉さんにはさっき可愛いと言われたから予想は出来てただけど……。

「店主さんもそう思いますよね？」

「ああ」

ああ、そんなあ……と言おうと思ったのに、店主さんが何か真剣な表情をしている。

反応が微妙すぎて、どう反応していいか分からなく、そのまま発言タイミングを失って口を閉じてしまった。

「店主さん、そんな顔しないでくださいよ。この子も黙っちゃったじゃない」

「……これはお節介かもしれねえが、坊主」

「へ？ 僕ですか」

「おう、坊主だ」

お姉さんにはお客さんで僕には坊主って……。

「坊主、このお客さんに惚れてるんだろ？」

真剣な表情つくって、何を言ってくるのかと思ったら、ただの痴話だった。

「え、そんないや、そんなもんじゃなくって……」

「惚れてるんだろ？」

「は、はい」



ずい、と顔を近寄られて、思わず頷いてしまった。

あんな迫力のある顔を近づけるなんて卑怯だ！

ま、まあ、お姉さんと話していたいとか、会いたいと思うのは惚れてるっていうのかなあ？

でも、惚れてるって言われて、悪い気はしない。

しかし、はあ、と息を吐かれて、

「坊主、このお客さんはやめとけ」

「は？」

「ちょっと店主さん？ いきなりそれは失礼じゃない」

「確かにお客さんはこの坊主に勿体ねえくらい別嬪さんで、気立てもいい。俺が嫁にもらいたいぐらいだ。

だけど、お客さんの宿命を背負えるほど、この坊主は強くねえ」

「しゅ、宿命？」

話が突発的すぎて、わけがわからない。

「店主さん、私が宿命を負ってるってどういうこと？」

「お客さん、お前さんも分かっているはずだ。

何かに追われているんだろ？」

「あなた、誰？」

スッ、とお姉さんが立ち上がり、雰囲気をはらりと変える。  
威圧するような視線で店主を見ている。

「お、お姉さん？」

「お客さん、切羽詰ってるのは分かるがよ、熱<sup>い</sup>り立ち過ぎるのは良くねえと思うぞ。

俺みたいな若者にもすぐに分かつちまうくらい、今のお客さんは分かりやすい」

「……………そうね。ごめんなさい」

そういつと、立つときとは違い、ゆつたりと腰を下ろす。

雰囲気も驚くほどやわらかくなり、さっきまでの殺気が嘘のようだ。

あつ、今のギャグじゃないぞ。僕はこんな場面でギャグを言うほど、空気が読めないわけじゃない。

「ま、こういう仕事をやると、だんだんお客さんを見る目が良くなる。

特に、こんな辺境で店を構えてると、な」

「……………そうですか」

な、なんか、勝手に話が進んでいる。

僕はどうすればいいのか？

いや、どうもしなくていいのか？

「ま、そういうわけで、坊主。このお客さんはやめときな」

「は、はあ」

いきなりそういわれても、はいそうですか、とは言いつらいが、お姉さんが何も言わないならその通りなのだろう。不本意だが、しぶしぶ頷く。

「あの、ところで気になったんですけど……」

「どうした？」

「さっき店主さん『俺みたいな若者』とか何とか言っていましたけど、その失礼ですけど、店主さんってそんなに若くないんじゃない……」

「そりゃ、坊主にとっては若くないだろうよ。俺は今年で29だからよ」

「坊主にとっては……って、お姉さんにとっては違うんですか？」

すると、店主さんの目が丸くなり、沈黙が流れる。

すぐにくくく、と笑いをこらえたような声が聞こえて、ムツとして、

「何がそんなにおかしいんですか？」

「くくく、流石に女性に年の話はしちゃいかんよ」

と言つても、意味の分からないことを返される。

何がそんなにおかしいんだ？

年って、また年齢の話か……。

でもこの話題はお姉さんが怒るし、すぐに流そう。

「いえ、話してあげてください。この子に未練を残さたくない  
ので」

「くくく、お客さん、わざとか？」

「い、いえ。まさか惚れられてるなんて思わなかったので……」

「そうか。坊主、このお客さんがどれくらいだと思つ？」

この前24つて言つて微妙な顔されたし、答えづらい。

お姉さんの方を見るとコクツ、と頷かれる。

だから……、

「21、だと思います」

「な、何言つてるのよ。この前は24つて言つてたわ」

「くくくくく、あつはつはつはつはつはつはつはつはつは  
つ」

ついに笑いがこらえられなくなった、といわんばかりに店主が盛

大に大爆笑する。

お姉さんの方を見ると、うつむいて何も言わない。  
心なしか顔が赤く見える。

ようやく、笑いが微妙に止まり、店主が口を開く。

「い、いや確かにそうだな、くくく。お客さん、今から市役所に年齢の申請をしてきraitうだい？」

「か、からかわないでください！」

そついいながらもお姉さんは、顔をあげない。  
相当恥ずかしいらしい。

いつも余裕を保っていたお姉さんからはとても想像できない。  
これが年の功か？

「坊主、俺の見立てを教えてやろうか？」

「え？ は、はあ、お願いします」

「そうだなあ、俺の見立てだと……ざつと33つてところだな」

「ええ！ お姉さんが……さんじゅうさん？」

30代と聞いて、化粧の濃い口うるさい英語の先生や、ぼさぼさの髪にめがねの冴えない理科の先生を思い出す。

……似ても似つかない。

「うん、まあ、当たらずとも遠からずって感じね。私は35」

「35？ そんなあんな気持ち悪い先生と同年代なんて……」

「あれ？ 優秀校の生徒会長様が教師の悪口を言っているのかしら」

「いくら頭のいい生徒を集めた学校と言っても、先生まで頭がいいとは限らないですよ……」

「ははっ、真理だな。」

コネを使って学校の知名度をあげて、入試の試験問題を難しくすりゃ優等生なんて簡単に集まるってもんだ。

それに気づいたって意味では坊主もなかなか頭のいいこった」

「頭が悪くなくても、授業を受ける側になれば自然と分かりますよ」

「ははっ、なるほどな」

その後は店主さんに新しくラーメンを出されたことによって、放置されていたラーメンが伸びていることに気づいた。

僕たちは慌てたが、「お代はいらねえ」とか言われて僕は取り出しかけたサイフをポケットにしまった。

しかし、お姉さんは「授業料も入ってるから」といって、強引に2千円払った。

しばらく、互いに言い合っていたが、最終的には「また伸びちまうからさっさと食ってくれ」といって、お代をもらっていた。

今度は会話しながらも、食事もちゃんとした。

「それじゃあ、また来ます。ごちそうさま」

「おいしかったわ。ごちそうさま」

「あいよ！」

そうして僕たちは店を出た。

その後、僕の希望で映画を見た。お姉さんの希望でラブロマンスになった。

映画を見た後はお姉さんの希望で買い物にいった。夕食の材料らしい。

そうして僕たちは帰路についた。

「今日は楽しかったです。誘ってくれてありがとうございました」

「私も楽しかったわ。また今度……と言いたいところだけど……」

「え？　だめなんですか？」

「……うん。本当に残念なんだけど」

「そう……なんですか」

「さっきの宿命の話、覚えてる？」

「ええ。といってもお姉さんに宿命があるって話だけしか聞いてませんけど」

「……まだ、お姉さんって言うてくれるんだ？」

「はい。 今更、「おばさん」って言っても違和感がありすぎですから」

「ふふっ、ありがとう。」

……それで宿命っていうのは私、ある人から逃げてるんだ」

「……なぜかきいていいですか？」

「ごめんなさい。 これはいえないの。」

それでここを勘ぐられた可能性があって、今すぐにもここを出ないといけないのよ」

「……そうですか。 お姉さん」

「何？」

「うちに来ませんか？」

「え？」

「あの、その、お姉さんの家がだめなら、うちでっていうのはだめですか？」

「お誘いは本当に嬉しいんだけど、それだと私が外に出れないですよ？」

だから本当に申し訳ないけど、町を出なくちゃ……………」

「そうですよね……。 無理いつてすいません」



「いえ、言ってくれて嬉しかったわ。ありがとう。  
気持ちだけ受け取っておくわ」

「はい……………」

「……………」

「……………」

それから、僕たちはバス停に着いたら別れてしまふのだろう。  
それはとても残念なことだ。

とても残念だけど……………しょうがないことだ。

僕には力も覚悟もない。 お姉さんを救えない。

「……………お別れね」

「……………ええ」

「しっかりなさい。 一週間前と同じになるだけじゃない」

そうか、そういえばお姉さんと会ってから一週間もたってないの  
か。

でも……………、だからといってさびしいのは変わらない。

ちよつと前までは、家族から見放され、クラスの連中も一部を除  
いてのけ者にして、生徒会長なのに会議で空気。

そして、その一部を改善してくれたのはお姉さんだ。

クラス連中どこるか全校生徒に見直され、生徒会でもしっかりと  
発言できている。

それに、最初に僕とまともにしゃべってくれたのは、お姉さんが

初めてだ。

僕の取柄<sup>とりえ</sup>は、マジメなことで成績だけだ。

がり勉ではないが、がり勉っぽい僕は忌み嫌われていた。

一応、生徒会長だから大口叩いて言う奴はいないが、ひそひそといわれてた。

そんな僕と初めてまともに話してくれたのだ。

僕はお姉さんともっといたい……………。

でも…………、わがままはいえない。

「いえ、一週間前とは違いますよ。 お姉さんのお陰で、学校では空気じゃなくなりましたから」

「…………ふふつ、落ち込んでくれるかと思ったけど、そうじゃなくて安心したような、がっかりしたような…………」

「落ち込んでますよ。 だけど、お姉さんにこれ以上迷惑はかけられませんよ。

今の僕じゃ、心配の種にならないように頑張ることしか出来ませんから…………」

「そう、成長したわね。 よかったわ。

…………それじゃ、もう行かなきゃ。

ここの町に戻れたら、いつもの時間にこのバスに乗るから。

またね」

「今までありがとうございました」

最後にお姉さんを見ると泣きそうで、今もちょっと涙が出てて見られたくなくて、感謝の意味を込めて、三重の意味で頭を下げた。

プシュッ、とドアが閉まる。

その音で僕の我慢は限界を超えたのか、涙がボロボロ落ちてくる。それを袖でぬぐうと、今度は嗚咽が漏れてきた。

全然成長できてませんよ、と心でお姉さんに返して、泣き崩れてしまった。

……それが僕の初恋の失恋話。

### 第三話 見知らぬ少年との一週間

会ったのはごくごく普通な少年だった。

いつも同じ時間にバスに乗るとたまに見かける少年。

長すぎない黒髪。 素直な目。 ボタンを上まで閉めて、ネクタイもキチツとした乱れのない制服。

普通のマジメな少年見えた。

初めて会話をしたのは、6日前の朝だった。

その少年は、私にもたれて寝ていた

しばらくすると、学校前のバス停まであと少しのところまで来ていた。

流石にマズいと思って、起こすもなかなか起きなかった。

寝不足だったらしい。 雰囲気で悟った。

マジメな生徒っぽいのだ。 何か、学校で進まない企画でもあるのだろう。

本当に気持ちよさそうに眠るので起こすのは気が引けたが、それは少年のためにならない。

頬をつねってみた。

起きたのはいいが、目をこすつてるときに、たまたま胸にひじが当たった。

まあ、別にどうでもよかった。 これが20年前の私ならちよつとは怒ったのだろうが、そんな年でもない。

だけど、少年は必死に謝ってきた。

そうこうしてる間に扉が閉まった。

少年は慌てて、叫びながらバスを降りていった。

その次の日、何となく昨日もたれて寝ていた少年の隣へ座った。座って目が合ったと同時に、謝られた。

マジメな少年のことだ。　かなり悪く思っているのだろう。しかし、私の方は気にしてなかった。

それよりも少年が、　胸　という単語を私へ発した時から発生してる視線の方が痛かった。

そのことをいうと、少年は周りを見渡した後、赤くなって外を向いてしまった。

ちよつと拗ねてみたけど、おばさんがすることでもないな、と反省して黙っていた。

また次の日、また少年の隣へ座った。

座ったと同時に、包装された箱を差し出された。

断って、無視もしていたが……、少年も手を引つ込めない。

やがて、これを受け取れば少年の気も済むか、と受け取った。

一応、贈り物をもらったので、笑顔で礼をした。

そしたら、赤くなつて、そつぽを向かれてしまった。

純情な子ね、と苦笑しながら、でもその雰囲気嫌いになれなくて、黙って座っていた。

やがて少年は学校前で降りた。

箱の中身はクッキーだった。　この町で評判の店のクッキーだ。

仕事の休憩中に頂いた。

評判の店のクッキーだからか、少年からもらったからか、どちらものか、他の理由なのか。

とりあえず、おいしかった。

少年と初めて会って4日目、今日もまた少年の隣へ座った。

クッキーのお礼を言ったら、なぜかお礼を言われた。

理由を聞いてみると、生徒会長だから遅刻は出来ないんです、と語られた。

今まで普通のマジメな子だと思っただけど、確かに考えてみればこの時代に、ここまでマジメな生徒は珍しかった。

時代が流れて、マジメや謙虚も流されてしまったのだ。

この子は数少ない、時代に流されない人だ。

そう思うと勿体ないと思った。

ここまでいい人間なら、胸を張って自信を持てば、いい大人になるはずだ。

そうして、未来に、素敵な大人が一人増える。

それはいいことだ。

そう思ったから、少年にアドバイスをした。

どういう言動で皆の信頼を得られるか、どう気をつけて行動すればいいか。

どうすれば緊張を軽減できるか、どう考えてれば冷静に行動できるか。

そういうことをドンドン言っていく。

少年は必死な顔をして、私の言ったことを頭に叩き込んでいた。

頑張ってる少年を見て、もっと応援したくなった。

せっかく手が空いていたので、もうちょっとキレイのある髪型や容貌にしてみた。

化粧品の種類や眉毛をそって描くのは、せっかくのマジメさが損なわれるので、髪を整えて眉毛もキリツと見えるように剃って。

制服を直した所で、学校前についた。

教えることは一応全て教えられたので、満足だった。

しかし、元気がなければ意味がないので、一応元気はあるみたいだが、また明日、と挨拶を試してみた。

そうすると、笑顔で、また明日、と返された。

ちょっと嬉しかった。

今日の仕事は頑張れそうだ。

平日の最後、日課となった彼の隣の席へ今日も座る。

座ると同時に昨日のことを報告された。

どうやら全校集会があつて、ちゃんと成功したようだ。

ちよつと嬉しい。

しかし、妙なことを言われた。

少年からは お姉さん と呼ばれた。

念のため、何歳に見えるか、と聞いてみた。

24歳つて返ってきた。

嬉しいけど、恥ずかしさが30倍くらいあった。

ボーツとしていたのだろう。

少年に、怒ってますか、と聞かれるまで周りが見えてなかった。

緩んでいた顔の筋肉を引き締めようと思っても、ぜんぜんだめだった。

それからのバスでの出来事はあまり覚えていない。

結局、我に帰ったのは終点の駅についてからだった。

昨日の仕事は結局仕事がかどらず、終始頬が緩みっぱなしだった。

同僚に、何歳に見えるか、と聞いた昨日の私の頬を本気でひっぱたいてやりたかった。

今日はその同僚と顔をあわせるので、気まずいな、と思いながらバスに乗り込むいつもの席に少年が座っていた。

なぜいるのか、と聞くと今日も学校があるらしい。

進学校は大変だ。

そう思ってたなら、何か企んだ顔で、今日も仕事ですか、と聞かれた。

何を企んでいるのかは知らないけど、特に隠すことでもないの

無難に、仕事、と答えた。

そして、ニヤリと口角を上げられた。予想通りの回答らしい。

あ、そうか、学生かどうか確認されたのか、と気づいたので、大学生でも仕事はする、というマジメな顔でノリツッコミを返された。

彼は天然らしい。

ちよつといたずら顔で、カマをかけたことに対して何をしようか、口に出しながら悩んでいると、素直に謝ってきた。

さらに、どうしようかなあ、ともったいぶっていると、頭まで下げられた。

軽口だったので、慌てて頭を上げさせる。周りの視線が痛い。

まあでも、年が気になるのは仕方ないな、とは思った。

昨日、無反応だった謝罪もこめて、おおよそヒントとはいえないようなヒントを出した。

これ以上は流石に恥ずかしかったので、話題の変換を試みる。

彼もこれ以上は言及せずに乗ってくれた。

冗談や世間話で笑い合えた。

不覚にも、こんな日が続けばいいな、と思ってしまった。

今日はいつにもましてハイテンションだ。ルンルン気分だ。

昨日は同僚に、最近若くなったね、って言われた。

やっぱり、若く見られるのはうれしい。

あの少年のおかげかな、少し感謝しないと、と思っていると今日も少年がいた。

流石に日曜に授業はないと思うから部活なのだろう、と思って聞くと、なんと私に会いにきたという。

恥ずかしそうに言ってたが、流石に冗談だと思ったので軽く流した。

結局、少年は最後までバスに乗っていたので、市外へ用事だろうか、と思い、本日の予定を聞いてみた。

予定がないから帰って勉強してると思います、と返された。

本当に私なんかのために、会いに来てくれたようだ。

うれしい、といったらそっぽを向かれてしまった。照れているらしい。

本当は3時まで仕事があるのだが、1時に駅に来て、といってしまった。



私も年の差が開きすぎてる相手を誘うのは、恥ずかしかったのですぐに外に出てしまった。

返事は聞かなかったもので、来るかどうかはおるか、聞こえたかどうかもわからないが、律儀な彼なら待っているだろう、と勝手に決め付ける。

なので、同僚にも協力を要請し、今日の給料の3分の2あげるから、と強引に言って手伝ってもらった。

そうして強引に12時に仕事を終わらせ、同僚に礼を言って5千円を渡して、会社を発った。

そして到着したのは、12時半だった。

30分も早く来て少年が待っているはずもなく、仕方なく柱を背に辺りを観察した。

それにしても、駅前には本当に店がいっぱいある、と関心していた。その中には喫茶店や本屋など時間をつぶせる店もたくさんあって、どの店で時間をつぶしてるのかな、とか、帰って勉強しようとしてたくらいだから、喫茶店で勉強しているのだろうか、とか思いながら辺りを見ていた。

それでいつの間に時間がたったのか、お姉さん、と声をかけられた。

時計を見ると5分前。十分、社会人としてやっていける。

30分くらい待った、といったら慌てられたので、嘘、と言った。途端に笑顔で悔しそうな顔をしてたので、嘘が嘘とばれないように、移動しながら話そう、と提案した。

素直に従われて少し癪だったので、仕事を早く終わらせてきたのは本当、と言ってやった。

しかし、返事はなかったなので、聞こえていたかどうかはわからない。

行ったのは行き着けのラーメン店だった。

早い、安い、うまいの三拍子がそろったこのラーメン屋は、見つけたときから気に入っていた。

店主さんは無口だけど、気さくな人だ。この人柄も気に入っている。

店に入ってから少年をからかうと、お姉さん意地悪です、といわれた。

表情で冗談だと速攻でわかったから、お姉さんは意地悪ですよ、と返した。

この少年は冗談が下手だ。

からかい甲斐があると少年をからかっていると、店主さんに、年下をいじめすぎだ、といわれた。

かわいいでしょ、と何度も言っていたら、突然店主さんが真剣な表情を作っていた。

今までの話にそんな表情をする場面があつたか、と内心首をかしげていると、少年も微妙な感じで黙ってしまった。

このままでは埒が明かないので、冗談で流そうとした。

けど、店主さんはそのまま、少年に向かって真剣に、このお客さんに惚れてるか、と聞いた。

ちなみに『このお客さん』は私のことだ、と分かってしまつて、恥ずかしかったのでちよつと俯く。

そして少年は、はい、と店主さんに気圧されながらも答えた。

するとすぐに店主さんは、このお客さんはやめておけ、と言つた。なんだか水を差された気がしてムツ、となつた自分に驚いた。

そしてなんでなのか、問いただした自分にさらに驚いた。

私自身が少年に惚れているかもしれない。

理由を問いただすと、私が追われていることを一発で当てられ、その少年はそんな運命を背負う覚悟がない、ときっぱり言われてしまった。

秘密がバレ、少年のことを知っているようにいう、その両方に怒りを覚え立ち上がると、あんまり熱り立つな、と注意された。

そう言われてハッとした。

馴染みの店の店主さんが、私を脅かすはずはないのだ。

要するに、この少年を想うなら巻き込まないほうがいい、と暗示していたのだ。

それに気づいた後の私の心は穏やかだった。

店主さんが率先して、少年の気持ちを萎えさせる、私の年齢も話題になった。

追われていることを看破された挙句、年も看破されてすごい店主さんだと思った。

のはいいんだが、からかわれた。

どうやら茶目っ気もあるようだ。

今日は警告やアドバイス、気遣いをラーメン代に入れて、2千円を払った。

バスで今日の礼を言われた。

私も楽しかったから礼を言おうとした時。

会いたくなかったヤツらが視界に入った。

気づかれているのかどうかは、こちらを見ていなかったたので判断しようがないが、早めに出て行ったほうがいいのは明白だった。

追っ手が来るまではこの少年と過ごしていたい、と思っていただけに1日もしないで見つけるのはショックだった。

何とかそれを表情に出さず、礼を言っ、早めにここを発つことを伝えた。

そのことを言ったら少年が、少年の家に匿うことを提案してくれた。

本当はそうしたかったが、少年を巻き込むわけにはいかなかったので、適当に理由をつけて断った。

それから無言だった。

もうすぐでお別れなので時間が勿体無いとも思ったが、少年は話

しかけてこないし、私も話す話題がない。

そうしているうちに、私が降りるバス停辺りまで来ていた。

別れを告げると不安そうな顔をしてたので励まそうとしたら、迷惑はかけられないと言われた。

そんな頼もしくなった少年を内心、ちょっぴりうれしく、結構さびしく思い、バスを降りた。

#### 第四話 私の過去と宿命

私は家族がいた。

今でこそ独り身だが、ちゃんと愛した夫と子供がいたのだ。

だけど、変な誘拐事件に巻き込まれてからというもの、夫は荒れてしまった。

毎日酔っ払って、毎日女と遊んで、毎日殴られた。

流石に限界だった。

青痣ができたり、体が痛んだりして耐えられなかった。

息子は引き取りたかったけど、息子を引き取らせなければ離婚は出来ない、といわれれば頷くしかなかった。

幸いにも息子には暴力が及んでなかったため、それで妥協した。どうか私への暴力が息子に及ばないように、とそう願って。

私がようやく夫を少しずつ忘れることができ、仕事に身が入り始めた時期のことだ。

仕事帰りの家に帰る途中、家が見えてきたところで子供が目の前にいた。

夜遅くにどうしたの、と訊こうとしていきなり衝撃が走った。

腹を刺された、と知覚したのは、キラッと刃物が反射したのが見えてからだった。

あまりの突然の衝撃に悲鳴をあげることもなく、そのまま意識を失った。

一応、助かった。

気づいたら、病院のベッドで中だった。

後で聞いた話によれば、隣の割と仲のいい奥さんが見つけて、通報したそうだ。

傷は深かったが、出来る限り早く退院し、町を出た。

誰かは分からないが、とにかく離れなければ危険だと思ったからだ。

それからというもの、そんな子供に見つかっては逃げて。

見かけたら逃げて。

追われても逃げて。

時には裏道を、時には人ごみをかけながら逃げ回った。

そんな日常を繰り返したある日、とある子供が口走ったのだ。

私の元夫の命令で、私を殺そうとしていると。

その子供からも追われ、逃げ切ることはいくらでもできた。

しかし、それを聞いてから不安になった。

私と元夫との子はそのとき中学生くらいのはずで、襲撃者は明らかに小学生。

なので一応、私の息子はまだ私と会ってないことになる。

だけど、小学生を人殺しにさせるような人と一緒に過ごして大丈夫なのだろうか。

それだけが心配になりながらも、どうしようもなく、ただ願うだけだった。

そして今、あの少年に別れを告げた。

何となく気になったあの少年に会うことは、恐らく二度とない。荷物整理をする。

必要なものは、金品、着替え、携帯食料、スポーツ用手甲、護身用スタンガン、退職届けとアパートの解約届け、帽子とサングラス。大体こんなもんだ。

しかし、準備が出来たからといって、すぐに出るのも躊躇われた。

確かに早く外に出た方がいいに決まっているのだが……。

「私もどうかしてるわよね」

そうつぶやいて、ワインを取り出す。

なんとなく、この町にもう少し居たかった。

窓から見える街の明かり、月、漆黒の空。

真下を通る自動車、空に見える飛行機。

せめてあの少年と出会ったこの町を記憶に焼き付けられるように、景色の全てを酌にワインを煽った。

不意に

ピンポーン

と音が鳴った。

誰だろうか？

と、そう扉を開けた。

そこに立っていたのは、

黒装束に身を包み、刀を腰にさしたあの少年が立っていた。



## 第五話 父親からの手紙

僕が降りるバス停に着く頃には涙は止まっていた。

初恋といってもやはり思い出の数があるのかもしれない。

でも……、やはりさびしい。

生まれて初めて僕に普通に話してくれた人が、危機に瀕しているのに、何も出来ない。

……………無力だ。

そんな無力感に囚われながらおぼつかない足取りで家に帰ると、見慣れない客がいた。

「よう、イマイチ兄貴」

「ご機嫌麗しゅう、イマイチ兄さん」

「お前達か……」

数いる弟や妹の中でも群を抜いて、気に食わない2人だ。

弟の方はフォルテ、妹の方はライラと名乗っている。

黒装束に身を包み、茶髪や金髪が微妙に目立っていないくもない。それにしても学校で呼ばれているあだ名を何故知っているのか。

「兄さん、その反応はひどいですわ。わたくし達はわざわざあなたの帰りを待っていたのですよ？」

「僕は待つて欲しくなかったんだけどね」

「つれないことを言うなよ、兄貴。父様から手紙をもらってきたよ」

「手紙？ 任務なら受けないって言ったはずだが？」

「とりあえず読んでくれよ。俺は渡して来いって言われただけなんだから」

「ああ」

気に入らない2人だが、確かにここにいるのは父親のせいだ。

この2人は悪くない。

仕方なく手紙を受け取り、開封する。

『お前の町に暗殺対象ターゲットがいることが分かった。

名前は春日香澄かすが かすみ。35歳の女。

お前にその女を暗殺してもらいたい。

残念ながら写真はないが、一人暮らしだから住所がわかれば問題ないだろ。

その2人には陽動をやってもらって、事件が発覚するのを遅らせろ。

これが出来なかったら、一族から追放する。以上だ』

一枚目にはそんな手紙が、2枚目には目印の入った地図が入っていた。

任務、か。しかも暗殺。

今まで拒否すれば何も言わなかったのに、出来なかったら強制追放か。

追放されたやつは大抵、暗殺対象ターゲットになる。

俺は強くもなければ、頭が回るわけでもない。

要するに殺される。

「暗殺任務だつて。君達が陽動、僕が本丸、だそうだ」

「へえ。イマイチ兄さん、暗殺は出来ますの？」

嘲笑しながら問いかける妹。

僕の一族は、殺しが出来なければそういう対象になる。

僕が殺しをしたことがないから、僕もその対象ではある。

ここで出来ないというのは簡単だが、追放される可能性が高いので嫌でも嘘をつく。

「問題はない。だけど僕が本丸でいいのか？ どう考えても君達の方が向いてると思うけど」

「確かにそうですわよね」

「どんな意図があるのかは知らないが、3人でやるんだつたら確かにライラが陽動、俺と兄貴が本丸をやった方がいい。

しかし、父様の命令なら逆らうわけにもいかない。

そんな疑問を抱くだけ無駄だ」

確かにそうだ。それなら好都合だ。

僕は人殺しなんかするつもりはない。

だから暗殺対象は逃げてもらう。ターゲット

幸い、写真はないみたいだし、住所以外の情報が載っていないから、住居を変えればらく大丈夫だろう。

そして……、僕は死ぬつもりだ。

「そうですね。それで、時間と場所はどつしますの?」

「それは手紙に書いてないんだけど」

「じゃあ、俺達で決めろってことなんだろ。

俺とライラは街で暴れて周囲の目をひきつけて、兄貴がその間に本丸を叩く。差は1分、誤差は30秒以内。

場所は警察署の周辺、かつ人通りが多いところがいいと思うんだが」

時計を見る。6時か……。

「じゃあ、時間は7時、場所は菅原駅がいいと思う。

7時の菅原駅なら人通りも多いし、警察署も近いし十分目立つと思うよ。

それに僕の心が変わるうちにやりたいし」

「通信機を渡しておく。殺せる状態になったら連絡を入れる。タイミングを合わせる」

「分かった」

「それではごきげんよう」

「んじゃな。装備はここに入ってるぜ」

そう言って置き土産をおいて、去っていく2人。

とりあえずその装備とやらを見ると、黒装束と刀。

……まあ、僕に任せるってことは相当弱いんだろう。

仮に強かったら、こんな装備では勝てない。

剣道はやったことあるんだが、竹刀と刀はかなり違うから役に立たない。

「とりあえず、着替えて行くか」

着替えない方が、暗殺対象ターゲットに信用されるが、暗殺対象ターゲットを逃がすために話で時間を稼ぐ必要がある。

黒装束を着ないと、その時間も稼げない。

黒装束に着替えるために、家に入った。

## 第七話 お姉さんとの再会

ピンポン

自転車を漕いで、ここまで来た。時間は6時半。

ごく一般的なアパートの一室にあった。

暗殺をする場合、一番適しているのははずれの一軒家と親に聞いたことがある。

どうでもいい知識だが、理屈は近所の人に気づかれにくいからだそう。

「はい、どちらさまですかー」

チェーンロックをかけた状態でドアから見た顔に思考が止まった。

それは向こうも同じようだ。

口をぽかーんとあけて、ぼうつとしてる。

そうして数秒間、時間が止まったように全てのものが止まった。

そこにいたのはバスで会っていたお姉さんだったのだ。

先に動き出したのは、お姉さんだった。

ガチャンとドアを閉める。

.....。

そりゃそうだよ。黒装束に刀だからね。

..... やっぱり服装に気を使えばよかった。

「あの一、お姉さん？」

「あなたまさか、豪の命令で来た子？」

「そうですね……、すいません、そのままだったので話を聞いてもらえませんか？」

「いかんせん、時間はあと30分しかない。

いや、大目に見ればもつとあるんだろうが、逃げる時間もある。

「……………、ここは3階だから逃げ場はないのよね。

いいわ、聞いてあげる」

「ありがとうございます」

1階か2階だったらマズかったな、と思いつつ続ける。

「まず、僕はお姉さんに危害を加える気は全くありません」

「……………」

「今回のお姉さんの追跡者は3人です。内2人は陽動で菅原駅にいます。

作戦決行、つまり駅で騒ぎを起こし、かつあなたを暗殺する時間は7時です。

それまでに、電車は使わず逃げてください」

「……………」

「バイクでも車でもいいですが、高速道路は使わないでください。  
うちの家族って何か異常で、高速道路の料金所のカメラの映像と  
か普通に見れるので場所が特定されます」

「……………」

「僕がいたら、出れませんよね。」

僕はもう帰りますから、お姉さんも早く逃げてくださいな。

……………今度こそ、さようなら」

そう言っただけで立ち去る。

もっと言いたいことはあるが、お姉さんにも迷惑だし、逃げる時  
間は早い方がいい。

さて、あの2人にはどういいわけするか……………。

「待つて」

お姉さんの隣の隣の部屋のドアの前辺りまで歩いたところで、そ  
ういわれて振り返る。

ドアを開けて、お姉さんが出てきていた。

「お姉さん、早く逃げないと……………」

「その前に2つだけ聞かせて」

「……………いいですよ」



どうしようか迷ったが、今までの経験からお姉さんに口で勝った事はない。

説得するよりは質問に答えたほうが早く逃げてくれそうだ。

「なんで私を助けるの？」

「僕は人殺しなんてしたことがないですし、これからはしたくないからです。

対象がお姉さんなら、なお、ですけど」

「……………、あなた、一郎？」

「はい、そうですけど……………、なんで僕の名前を？」

「本当に？」

「はい」

僕の疑問はスルーみたいだ。

そう思っていると、お姉さんが駆け寄ってくる。

そして、抱きしめられた。

……………え？

いきなり何を……………、という言葉を飲み込んだ。  
なぜならお姉さんが泣いていたからだ。

戸惑いながらも、抱きしめ返す。

背中をさすって、お姉さんが泣き止むまで待った……。

「もう大丈夫よ、ありがとう」

「いえ、これくらいならいくらでも……」

「……、ねえ一郎君。落ち着いて聞いてくれる？」

「はい」

名前を呼ばれてドキツとした。

お姉さんにはキミとしか呼ばれていなかったからか。そつえば、お互いに名前も知らなかったのか……。

「実は私、一郎君のお母さんなんだ」

………は？

## 第七話 逃走

お姉さんの言っている意味が理解できなかった。

お姉さんが僕のお母さん？

いやいや、そんなわけがない。

「マジですか？」

「ええ、本当よ」

だそうです。

いや、それにしても行方不明の母と会うなんて、奇遇ですね。

……………え？

いやいや、マジ？

「親子の感動の再開。 今のお気持ちはどうですか？」

ハッとして後ろを見ると、ライラ。

「ライラがなんでここに……………」

「残念ですわね、兄さん。 この手紙をよく見てくださいますし」

距離があるのでよく見えないが、先ほどの手紙と変わってない気がする。

っていつかゴミ箱に捨てたのに、ここにあるのは回収してきたのか。

いちいち、苦労してると思う。

しばらく見てみると、父親の手紙の証である印鑑が口紅に変わっていく。

……考えなくても、ライラのだろう。

つまり、手紙自体が偽物で作戦も何もない、ということだ。

「そういえば、お前は『偽り』が得意だっけ」

「覚えていただけたんですね。光荣ですわ」

「まあ、そういうわけだな」

後ろに振り返る。

そこにはフォルテがいた。

「挟み撃ち……か。やられた」

「待つて！ あなた達の目的は私なんでしょう？  
この子に手を出さないで！」

「残念ですわね。兄さんがあなたに手をかけたら見逃すつもりでしたから」

「お願いします！」

近くで何かが動いたと思ったら、お姉さんがフォルテに向かって土下座してる。

「お、お姉さん、僕は別に……」

「そうですね。今更そんな……」

「いや、そうだな。兄貴が春日香澄をここで殺せば、見逃す」

まっすぐこっちを見て、言うフォルテ。

「そうですね。それなら面白そうですね」

とライラも乗り気だ。

「いいわ。一郎君、私を斬って」

「え？」

「このままじゃ、どっちみち2人とも死んじゃうわ。だったら、一郎君だけ生き残って……」

確かに、そうだ。

アパートの廊下という道が2方向にしかない場所での挟み撃ち。逃げられない。

相手が戦闘員2人なのに対して、こちらは非戦闘員が2人だ。勝てる道理もない。

でも……………、

「やっぱりそんなことできないですよ」

「一郎君、お願い！　あなただけが私の希望なの！」

必死な顔をして、懇願される僕。

けど、やっぱりそんなことできない。

何か方法はないのか……？

「さあ、どうしますの兄さん？　この方と一緒に死ぬのですか？  
それともこの方を殺すのですか？」

「俺はどっちでもいいぜ。好きにしな」

ここは廊下。道は1つ。

……いや、道はこつちもある！

「そんなこと……できない！」

目の前のドアを開き、お姉さんの手を引っ張って中に入る。

開いてなかったらどうしようか、と心配だったが、どうやら大丈夫だったようだ。

「え、一郎君、ここヒトの家……」

「命がかかってるのに、そんなこと言ってる場合じゃないですよ！」

お姉さんを速攻で説き伏せて、ドアの鍵を閉める。  
リビングまで一気に入る。

「きゃあっ！ 誰！」

「すみません、追われてるんで勘弁してください！」

「本当にごめんなさい。春日と申しますが、2つ隣の部屋から何でも持ってっていいので！」

そう言ってる間にカーテンを引っこ抜き、互いに結ぶ。

そうしてる間に、ドアからゴッとする音が鳴る。

どうやら、破壊を試みているようだ。

防犯扉といえども、フォルテの前では無力と考えるべきだ。

あと、2発持てばいいほうだろう。

「どうするの？」

「体に結んでください」

カーテンを3つ連結させたところで、体に巻きつけ結ぶ。  
その間にまたドアが鳴る。

「すみませんが、警備隊呼んでもらえませんか？」

「ええ、分かりました」

警備隊とは、エリート集団の警備隊である。

全5人で構成される集団で、警察ではないので民営だが、かなり

の実力と迅速な対応が売りである。

といっても、本部はこれから遠く離れた場所だ。

2県もまたいたところだが、その場所からなら曰く、3分で来れるらしい。

呼び方は簡単で、警備隊で配布されているアクセサリーを購入し、スイッチを入れるだけである。

GPSで追跡してくれるので、誘拐されたときにも使える優れものだ。

まあでも、3分もかからずにここを去るから、役に立たない可能性が高いが。

アクセサリーをもらうわけにもいかないし。

「結んだわ」

「よし、飛び降りますよ」

窓を開け放って、ベランダに出る。

お姉さんを先に逃がすには、お姉さんを先に1階に下ろす必要がある。

1階ずつ降りていくとして、ここは3階だから、僕が先に飛び降りた方がいい。

「お姉さん、手すりにつかまっててくださいね」

「うん、無理しないで」

「無理しなきゃ、逃げられないよ」



そう言って、飛び込む。

そのとき、ドガンという音と、キャアという悲鳴が聞こえてきた。

急がないと。

少し落下して、腹にやわらかい衝撃が走る。

目の前には2階のベランダで、カーテンの長さはちょうど良かったようだ。

すぐにベランダに入り、

「お姉さん、飛び降りて！」

「頑張つてね」

僕の方は3階から2階、2階からと1階ずつ飛び降りてるけど、お姉さんは3回から1階に一気に2階飛び降りなければならないことに気がついた。

だったら、お姉さんを先に飛ばせておくんだった、と後悔したところで、再び腹にやわらかい衝撃が走る。

即座に刀でカーテンを切り捨てる。

「お姉さん、先に逃げて！」

「でも……」

「時間がない！」

カーテンを放りながら、手すりに手をかけ飛び降りる。  
もう飛び降りてるのだから、今お姉さんが逃げてもそんなに距離は変わらないけど、少しでも距離を開けないと……。

地面が近づいた瞬間に壁を蹴り、父親に習った受身で、回転して衝撃を少し消す。

……2階から降りるのは初めてだが、どうやら無事だったようだ。前方を見れば、お姉さんが顔はこちらに向けながら、走っている。

「なめてんじゃねえ！」

ドシンという音と共に、少し離れたところでフォルテが着地する。  
フォルテの能力は『属性付加：硬<sup>エンチャント</sup>』。

自身の体、あるいは周りの何かを硬くさせるらしい。  
故にこういう衝撃にはめっぽう強い。

「私達から逃げられると思ってまして？」

フォルテとは対照的にトンツ、という音とライラが共に着地する。  
ライラの能力は『属性付加：偽<sup>エンチャント</sup>』。

さっきの手紙に使った能力だ。何かを偽るという能力。  
多分、着地に能力は使っていない。

うまく2階のランダの手すりに着地して、衝撃を和らげたのだろっ、と推測する。

「逃げられると思うんじゃないくて、逃げたいんだよ！」

そういつて、一目散に背中を向けて逃げる。  
僕も卓球部の端くれだ。逃げるくらいなら……、と思つてると、

「失せる！」

後ろを振り向くと目の前に拳。

慌てながらも、卓球部で鍛えた反射神経で刀を抜刀し、受け止める。

ゴキッ

拳からそんな、骨が折れる音がする。

「んなっ！」

驚きでフォルテの目が見開かれる。

その隙に、受けた刀を流すようにして、足に斬りつける。  
ドバツ、と鮮血が舞う。

「フォルテ様！ おのれ、こしやくな！」

そういつて、背中 of レイピアを抜いて、顔面に刺突を繰り出す。

しかし、前情報で他の兄弟から、こんな情報を聞いたことがある。  
『ライラの初撃は属性付加を剣にかけて、顔面に刺突するように  
エンチャント  
見せかけて、心臓に刺突を繰り出す』

そんな情報だ。

まあ、体格的にも相手の体は僕の胸ほどしかない。顔面を刺すの

は至難の技だろう。

目の前に迫るレイピアを無視するのはかなり苦勞するが、一応、この兄弟ほどではないが訓練は受けている。

心臓の前に刀を滑り込ませると、見えないレイピアを刀の腹で受け止めた。

いくらフェイントだろうが、事前に情報があれば、怖くないということが証明された。

しかし、冷や汗を流さすにはられない。

「やつ！ はつ！」

しかし、レイピアの特徴はスピードだ。

心臓を突いた初撃が終わった瞬間に次の刺突が来る。

刺突といっても、『属性付加：偽<sup>エンチャント</sup>』のせいで、見える刺突とは違うところに見えない刺突が来る。

後ろに下がりながら、そこに刀を間に合わせはじく。

何故、そんなことができるのか、と言ったら目だ。

確かに、刃は見えないが、目が攻撃する方に向いているのでよくみればバレバレである。

目の方向の急所に刀をすべり込ませれば、防げるというわけだ。

しかし、基礎ポテンシャルが違いすぎる。

あちらはスピード、パワー、持久力、全てが勝ってるのに、こちらは体格でしか勝っていない。

刀であることも問題だ。刀は曲がっているが故に、受けには向いてない。

徐々に追い詰められていく……。

「ライラ！ 春日香澄の追跡は大丈夫か！」

「いえ、大丈夫ではありませんが、兄さんを生け捕りにすれば、この町から出られないでしょう。」

その内に、見つければよろしいと思いますわ」

「このっ！」

簡単に警戒が解けているわけではないが、会話に何割かは意識を割いているはずなので、レイピアの腹に蹴りを入れる。

「っていうか、お姉さんの心配をするってことは、お姉さんが暗殺<sup>ターゲット</sup>対象だったのは本当だったのか。」

ピキッ

そんな致命的な音が、レイピアから漏れた。

「え、そんなまさか！ わたくしのレイピアが蹴りごときで折れるなんて……」

そう声を出した瞬間、通信機を投げつけて、脱兎の如く逃走する。通信機にGPSがついている可能性があったからだ。

そして裏道に入る。あの2人は街中でも普通に騒ぎを起こす。

当然、ライラとフォルテの身体能力の方が勝るのだが、ライラの武器は折れ、フォルテは負傷している。

一方、僕は刀もちだ。念のため、振り返るが、2人とも追いかけてこない。

実際、フォルテの拳は怪我をしていないし、ライラのレイピアは折れていない。

僕の『属性付加：音』<sup>エンチャント</sup>で、そう錯覚させたのだ。

兄弟の中で長男のくせに弱いのは、ここにあった。

弟達は3歳から学校などにもいかず、ひたすら訓練しているから元の身体能力も劣っているが、超能力面でも劣っている。

弟達の超能力はすぐくて、武器から炎が出たり、ありえないくらい攻撃や機動が速くなったり、フォルテみたいに硬くなったり、ライラみたいに手品師みたいなことなど、全部戦闘で役に立つ。

だが、僕の場合は、ただ音が出るだけだ。

そりゃ、弱いはずだ。

武器を打ち合わせても、リンツとかゴーンとか鳴るだけで、学校のことを考えながら訓練をやったときなんて、武器を打ち合わせた瞬間、学校のチャイムが鳴って、その場にいた他の弟妹に笑われたものだ。

しかし、この戦闘では訓練時には考え付かないような使い方をすることができた。

一つ目はフォルテの拳。

フォルテの拳と僕の刀を打ち合わせたときに出了た骨の折れる音は、『僕の属性付加：音』<sup>エンチャント</sup>の能力で出したものだ。

能力とは意識で左右されるもので、自分の硬さに絶対の自信を持っていたフォルテと戦ったら勝てるわけもない。

そこで、骨の折れる音を出すことで、驚愕と不信を抱かせた。

そして、自分の硬さに自信がなくなったフォルテの足を、難なく斬れたというわけである。

二つ目はライラのレイピア。

これは簡単に、相手の武器を壊れたと錯覚させることで戦意喪失を狙った。

ただし、レイピアと刀を合わせたときにやると、刀が折れたと勘違いされてしまうので、わざわざ蹴りを放ったわけである。

まあ、レイピアを見れば、すぐにバレてしまうような小細工だ。すぐに追ってくるだろう。

「待ちなさい！　よくもこんな小細工を！」

「許さねえぞコリア！」

ほらね。

フォルテが刀傷を負っているのに走れているのは、ライラが何かしたのだろう。応急処置も訓練で教わる。

すぐに追って来てはいるが、それでも100mほど距離を稼いだ。  
エンチャント

近くのゴミ箱を倒して、中のゴミに属性付加を加える。

あの2人は、しょぼいバリケードぐらいにしか思っていないだろう。その予想通り、普通に突っ込んでいく。

だから、僕の罠に嵌る。

ドガアアアアアアアン!!!

後ろを振り返ると、2人が身を硬くして、立ちすくむ。しかし、何も起こらない。

当然だ。

ゴミに属性付加をかけて、ゴミを踏んで出る音を爆発音に変えたんだから。

それから何回か、爆発音が鳴り響く。

「くそつ、あの野郎！」

「許しませんわ！」

しかし、まだ振り切れない。  
あっちの方が走る速さも、持久力も上なのだ。  
もっと妨害する必要がある。

近くのゴミ箱から丁度上にあつた、歪んだスーパーボールを手に持ち、残りを全てばら撒く。

「何度も同じ手が通用すると思うなよ！」

それは、どんなことがあっても何も起こらない、と確信してると  
いう意思表示だ。

確かに何も起こらない。

でも、それが分かってても、この条件反射には逆らえない。

キ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ  
イ

そんな耳障りな音が辺りに響く。

僕はあらかじめ、耳をふさいでいたので大丈夫だが、後ろの2人はどうだろうか。

振り返らなくても分かる。2人は一瞬でも耳を押さえて、しゃがんでいただろう。

この音の正体は、黒板を引っかく音だ。



皆さんも経験はあると思う。

「ああああ！　うぜえ！　逃げないでかかってきやがれ！」

「追いついたら覚悟しなさい！」

そんな後方の叫びを聞きつつ、すぐ傍のカドを右に曲がる  
丁度いいタイミングでＴ字路になっていた。

これを左に曲がり、その時にスーパーボールを右に投げる。もち  
ろん属性付加はつける。  
エンチャント

ボールがバウンドする度に、タッタッタツ、と走る音が響く。

これで足音では、どっちに曲がったか分からないはずだ。

後方に２人が見えないうちに、見えたカドを右に曲がる。

「くそつ、どっちにいきやがった！！」

「足音がごまかされていますわね。フォルテ様は右を、わたくしは  
左を探しましょう！」

「分かった。何かあったら連絡しろ」

「はい、仰せのままに」

２人の声が反響して、僕の耳に響く。

……、もしかしたらこれは、僕の足音もかなり響いてるかもしれ  
ないな。

それはそれで、大変だ。

こればかりは、さっきの爆発音で聴覚がひるんであることを願う

しかない。

そんなことはかなり楽観的な考えっていうのは、分かっていたんだんだけど……、

「見つけましたわ！」

見つかってしまった。

しかし、まだ遠くだ。

「フォルテ様、兄さんを見つけてましたわ。場所はわたくしの走っている方向の少し前でございます」

やばい、フォルテに連絡を取られた。

これは事態が悪化したかもしれないな。

しかし、どうすればいいんだ？

やばいやばいやばい。全然思いつかなくなってきた。

不意に

ブオオオン

というエンジン音が聞こえた。

そうか！ 誰かの車に乗せてもらえばいいのか！

すぐに表通りへと、進路を変える。

「！！ マズいですわ、フォルテ様！ 兄さんが表通りを目指しましたわ！

乗り物で逃げるつもりの方でございます」

読まれた！

仕方がない、後は全力あるのみ。

車にさえ乗れば、僕の勝ちだ！！

## 第七話 逃走（後書き）

やっぱりあと二話の予定です。

申し訳ないですが、5/12に完成予定とします。

今は眠気と戦いながら書いてる状態で、効率が悪く、11日もバイトなので時間がとりずらいので。

12日もバイトはありますが、1日1話アップできるように頑張ってみたいと思います。

## 第八話 爆走

よし！ 追いつかれる前に表通りに出れた！

辺りを探すと、バイクに乗ってエンジンがかかる女性が見える。

この際誰でもいい！ バイクに乗せてくれ！

と思つてバイクに駆け寄ると、ヘルメットを放つてきた。

へ？ と思つてよく見てみると、ヘルメットの透明部分が黒っぽいから分からなかったが、お姉さんだ！

「ぼつとしないで！ 早く乗りなさい！」

「はい！ すいません！」

刀を納め、ヘルメットをかぶり、後部座席に乗る。

来た道を見てみるとライラがチラッと見えた。

「バイク！？」

「OKです。出してください！」

「しっかりつかまってなさい！」

「はい！」

実は女性をこうして抱きしめた経験はない。微妙に照れる。  
発つバイクにライラが追いつがるが、身体能力が高いといつても、

所詮は人間の小学生だ。

追いつかれそうになったのは、出始めだけで、加速するとドンドン離れていく。

「よし！ 振り切ったわね！」

「まだ安心しない方がいいです！ まだ何かあるかも知れません！」

「分かったわ！」

しかし、そういった矢先、

「くっそ、この野郎！ とまりやがれ！」

「まだいたのか！」

フォルテが車道に躍り出た。

これがライラだったら突っ込んでも大丈夫なんだが、なんせ3階から飛び降りても、刀で斬りつけても大丈夫だったフォルテのことだ。

このまま突っ込むのは危険だ。

「あいつは素手でバイクを止められます！ 避けてください！」

「そんなこと言っただってこのスピードじゃ……、いえ、しっかりつかまってなさい！」

そういった途端、キィィィという音を発しながらバイクが向きを

変えていく。

何とかギリギリ、フォルテの手が届く前に、向きを変えきり、Uターンにして今来た道を全力で突っ走る。

「くそっ、待ちやがれ！」

その言葉を聞きながら、バイクはひたすら進んだ。

「やっと逃げ切れた！」

「多分、大丈夫だと思います！」

バイクのエンジン音がうるさいので、いちいち大声だ。

「これからどうする！」

「分からないです！」

実際、こんなことはしたことはない。

少なくとも、もうお姉さんの家にも、僕の家にも戻れない。  
新たな生活をしなければならないのだ。

「とりあえず、行きたいところある！」

「じゃあ……」

と言いかけたとき、

ブoooooooooooo

というエンジン音が聞こえてきた。

嫌な予感がしたので、振り返ると大型バイクにフォルテとライラが乗って追って来ていた。

ヘルメットもつけてない。

「待ちやがれええ！！！」

「しっこっ！」

まだ追ってきてたのか。

さっきので諦めて欲しかった。

しかし、こっちは中型バイクで大人＋高校生。

あっちは大型バイクで小学生×2だ。

重量差も馬力も絶望的過ぎる。

「お姉さん、やばいですよ。大型バイクで追ってきました！！！」

「分かってるわ！でもどうすればいいの！」

それは……そうだね。

戦力差が圧倒的で、全然お話にならない。

僕的能力も役に立たないし。



「何か出して欲しい音ってないですか！」

「なんで！」

「僕は僕が聞いたことある音だったら、出せます！  
何とか追い返せる音とかないですか！」

……でも、ないだろう。

爆発音はもうだめだろう。

黒板の引っかく音もバイクの音がうるさくて聞こえない可能性が  
高い。

あとは、

あとは何かないのか？

そう思っていると市街地に入る。

「パトカー！」

「へ？」

「パトカーのサイレンとか鳴らせる！」

「やってみます！」

裏路地でなくても、市街地なら視界を防ぐ場所なんていくらでもある。

大きい建物の十字路を曲がり、

ファンファンファンファンファン

余談だが、属性付加<sup>エンチャント</sup>という代物は、自身か或いは自身の周りに何かをつける能力である。

当然音は、物体にそのまま付加しても意味ないので、足に属性付<sup>エンチャ</sup>加をつけてバイクのサイドをパカパカと蹴っている。

ふと、後ろを見る。

キイー、ブロロロロロロロ

2人はしつかり追跡していた。

……、まあ分かつてはいたんだけどね。

「撒けませんでしたね!」

「どうする!」

っていうか、警察はまだなのか?

ヒトの家不法侵入して、普通のバイクで二人乗りをし、法定速度をぶつちで抜いているのに……。

日本の警察は大丈夫なのだろうか?

まあ、警官が減少してるのが原因なんだろうけど……。

と、いけない。

警察が来るか来ないかを考えてもしょうがない。

来るときは来るし、来ないときは来ない。考えるだけ無駄だ。

かといって、他に何かあるわけじゃない。

徐々に追いつかれてるし、どうしよう?

「何か、いらないものありませんか！」

「どうして！」

「いや、投げて当たらないかな！ と！」

「冗談言わないで！」

いや、本気だったんだけど……。

でも、投げるものがあるわけでもないし。

お姉さんはそこら辺のドライバーよりは全然いい動きをしていた。  
小回りを利かし、どんどん道を曲がり引き離そうと試みていた。  
しかし、やはり性能の差か。

ついに、真横ぴったりまで追いつかれてしまった。

「この！ さっさと止まるのですわ！」

「お断りだ！」

バイクの上での戦闘だ。

ライラはレイピアを、僕は刀を取り出し、互いに斬りあっている。  
運転席も、いろいろな技術を駆使し、距離を取ったり、詰めたり、  
蹴りを入れたりしている。

「さつさとくたばれ！」

「あなた達こそ、早く帰りなさい！」

しかし、戦況は明らかだ。

まず、こちらにはフォルテに対する攻撃手段が存在しないのに、あつちは普通にお姉さんを攻撃できる。

お姉さんは必死にかわしているが、徐々に切り傷が増えてきて時間の問題なのが目に見える。

それに刀は両手用の武器だ。当然、片方の手でお姉さんにつかまっているため片手で刀を振っている僕は満足に振れない。

対してライラのレイピアは片手用だ。故にキツイ。

そんなことを考えていると、

「もらった！」

「くっ、しまった！」

持ち手を斬られ、刀を落としてしまった。

カラン、という落下音が哀愁を漂わせる。

幸い傷は浅いが、武器がない今、なんの慰めにもならない。

「死になさい！」

そういつて、大きく腕を引く。

バイクもガードレールいっぱい追い詰められているため、距離の空けようはない。

……もつだめか？

## 第八話 爆走（後書き）

もうちょいです。意外とバイトがある日の1日1話アップはキツイ

……；

頑張って最終話も鋭意製作中です。

出来るだけ早くしているのですが、どこまで書けばネタバレしにくいか、とか計算するとどうしてもスピードがあ……、言い訳はよくありませんね。

一応は順調に進んでいるので、速ければ夜の間、遅くても明日中にはアップできる予定です。

## 第九話 逃走の終わりと新たな生活の始まり

最後は……、情けないと思ったが目をつぶった。

もう防ぐ手段はない。

小学生だが一般人ではない、という常人を超えた弟と妹からこれだけ逃げただけで奇跡だ。

あとは、頑張って警察が捕まえてくれることを祈るしかない。

……。

……。

……。

あれ？

いつまでも、来るべき衝撃が来ない。

お姉さんが斬られたか？……とも思ったが、バイクがぐらついてないなら、それもないだろう。

じゃあ、どうしたのか？

時間が止まったのか？ いや、まさかマンガじゃあるまいし。どうなったのか、気になって目を開けてみた。

僕たちが乗るバイクと、フォルテとライラが乗るバイクの間に金属の鋭い何かが見えた。

恐らく、これが最後の一撃を退けたのだろっ、ということが何となく予測できた。

その金属の何かの根元の方を辿ってみると……………、

「自転車？」

いやいや、そんなわけがない。

今は絶賛爆走中の法定速度ぶっちで、100km/hは出ているはずだ。

それこそマンガじゃあるまいし、だ。

「警備隊隊長、神崎雄介だ」  
かんせいき ゆうすけ

「同じく警備隊戦闘班、三浦千佳」  
みづら ちか

警備……隊？

「その2台。5秒以内に止まらなければ、実力行使で止める」

は？ 実力行使？

「5！」

カウントされて慌てた。

「お、お姉さん、止まりましたっ！」



「4！」

「色々とグレーゾーンだけどつかまらない、ってことはないわよね！」

「3！」

「どっちみち警備隊相手じゃ逃げ切れないです！ 素直に止まりましょう！」

「2！」

「分かったわ！」

キイイイ、という音を立てて減速するバイク。  
それに並んで、隣のバイクも減速する。  
向こうの2人も逃走はできないと踏んだようだ。  
降りたら片をつける気か？

「よし、いい判断だ。 全員、降りろ。 抵抗すれば、無傷で済む保障は出来ない」

……。 まあ、元より抵抗する気はない。 乱暴な気はするが。  
おとなしくしたがって、降りる。

普段つけないヘルメットが邪魔だったので、ついでにとって後部座席に置く。

お姉さんも同じようにして、ヘルメットをカゴに入れる。  
フォルテとライラも、素直に降りる。

その間に三浦千佳と名乗った女性は、周りにカラーコーンを置い

て道をふさいでいる。

「一応、バイクの鍵を預かっておく。こっちに渡せ」

お姉さんがバイクのキーをとって、神崎雄介と名乗った男性に渡す。

フォルテも同じように渡して……、

「食らえ！」

「危ない！」

神崎さんに殴りかかった。

フォルテの拳は神崎さんの鳩尾に入る、

「ぐあっ！」

「抵抗はするな、と言ったはずだが？」

と思いきや、その手首を掴んで背負い投げをした。

片手でバイクの鍵を持つているから、片手で投げたことになる。

フォルテは属性付加で、身体的ダメージはないだろうが、不意打ちを避けられたのだ。

抵抗する気はなくなったに違いない。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

「次の事件か。千佳、ここは任せられるな？」

「もちろんです、隊長！ 3時間以内に任務を遂行し、帰還するこ  
とを約束致します！」

「よし、いい返事だ。では諸君、私は失礼する」

警備隊の隊長はバイクの鍵を三浦さんに渡してそっくり残し、自  
転車にまたがって瞬く間に見えなくなった。 比喩ではなく、本当  
に瞬いている間にいなくなった。

三浦さんは隊長がいなくなるのを見送ると、こちらに振り返る。  
その瞬間、ライラが動き出した。  
レイピアを片手に 、

「痛っ」

「隊長と違って手加減できないから、次は腕は斬り飛ばす」

胸を突くと思った瞬間、レイピアは吹っ飛んで、ライラの手から  
も血が出ていた。ライラもかなり驚いている。

まあ、隊長が印象的だったために、隊長が強くても隊員はどうか  
というのはあった。しかし仮にもエリート集団の警備隊だ。その判  
断は誤りである。

三浦さんの方を見れば、血が滴っている刀を握っている。  
刀の方を見ていると、三浦さんが刀をハンカチで血を拭いながら  
近づいてくる。

「車道に落ちてたけど、返すの忘れてた。返す」

「あ、ありがとうございます」

刀は別にどうでもよかったが、後で換金すればいいか、と受け取る。

「今はあなたが持つより、そのあなたが持った方がいい」

「私が、ですか？」

「銃砲刀剣類所持等取締法、18歳未満の少年少女に所持の許可を出してはいけない。

これから警察が来るから」

どうやら18歳未満に見えるらしい。

そんなに童顔に見えるだろうか。

これでもあと3ヶ月で18なのだが……。

事実なんだから、素直に渡すしかないんだけど。

「そうですね。じゃあ、お姉さん、どうぞ」

「え、ええ」

そういつて、恐る恐る刀を受け取る。

まあ、初めてなら仕方のない反応だ。

「この中で春日って誰？」

「私ですが……、何でしょうか？」

「あなたの家の2つ隣の伊吹さんに家の物あげる、って言った？」

伊吹さんが誰かは分からないが、それらしき発言をしたのは不法侵入したときだ。

すっかり忘れていたが、確かにそんなことをいった。

でも、僕の家族に狙われて、その中のたった2人を無力化しただけだ。

知られている家に戻ることはしないだろう。危険すぎる。

そういう理由で家に戻れないから、あげても問題はないだろう、と思う。

まあ、僕がそう思うだけでお姉さんも同じ考えとは限らないけど。

「はい、いいました」

「いいの？」

「はい、女に二言はありません」

「分かった。じゃあこれにサインして頂戴」

「ええ、分かりました」

そういつて、三浦さんに渡された紙にサインを書くお姉さん。  
あの2人も今は悔しそうにだまってみてる。

「よし……」

ファンファンファンファンファン

パトカーの音が鳴り響いてきた。

やっと来た……。

出来れば、追われてるときに来て欲しかった……（切実

「田村刑事だ。三浦警備隊員、ご苦労だ」

「12秒遅刻。もっと早く来なさい」

じゅ、12秒って細かい……。

分のスケジュールを組む人は知ってるけど、秒のスケジュールつてのもいたんだ。

「上司じゃないあなたに言われたくない」

「文句は受け付けない。」

これが、バイク盗難の被害者の住所と電話番号、不法侵入の被害者の住所と電話番号。

こつちが、不法侵入被害者への損害賠償支払いの受託証。

その子供2人は不法侵入、器物損壊、窃盗、殺人未遂、無免許運転、刃物所持、スピード違反の罪を犯した。当然逮捕対象。

こつちの2人は、不法侵入とスピード違反をしたけど、逃げたてしょうがなかったし、不法侵入は損害賠償支払ってるし、減点くらいでいいかと」

改めて2人の罪の多さを知った。

実際は殺人などもやっているはずだ。警察に証明できなきゃ意味

ないけど。

でもこれだけの罪を犯すと、罰はどれくらいになるのだろうか？  
それに、僕たちも罪を犯したのか。

それを三浦さんがかばってくれている。……ありがたい。

「……、そうだな。

そのあんた、免許を拝借してもいいか？」

「ええ、どうぞ」

「よし、青木。減点の処理しとけ」

「はい」

そう言っ、刑事さんは免許を受け取り、青木さんに渡して減点の手続きをする。

その間に三浦さんが口を開く。

「その2人は厳重注意。油断は禁物だから」

「こんな小学生なのか？」

「見た目は関係ない。それはあなたが一番知っているでしょ？」

「……ああ、そうだな」

確かに超能力の行使に見た目は関係ない。

僕も曲がりなりにも超能力は使える。しょぼいけど。

それにしても、刑事さんは素直に従うようだ。  
超能力者を逮捕したことがあるのだろうか？

「じゃ、後は任せるから。こっちの2人は回収するから」

「いや、その2人も証人として、任意同行を願いたいのだが」

「任意同行なら拒否できる」

「ぐつ。 正式な手続き踏んだら、……いいな？」

要するに、あの2人が裁判所で正式な書類が作られるときに、証人として後で来いということなのだろう。

いろいろと面倒だが、この際仕方がない。  
でも、あんまり目立つと他の兄弟に見つかるからなあ。

「分かりました」

「なら、いいけど。じゃ、パトカー貸して」

「えつ、パトカー借りれるんですか？」

「いや。でも疲れたし、眠いし、たいちよーに置いてかれたし」

な、なんか三浦さんのイメージが崩れてく……。

最初は『もちろんです、隊長！ 3時間以内に任務を遂行し、帰還することを約束します！』とかそれらしいことを言ってたのに、言葉も態度も悪くなってきた。



まさか、あの言葉遣いは隊長に対してだけ、とか？

「チッ。……まあ、いい。青木、三浦を送ってやれ」

「この2人も一緒」

え？ 聞いてないんですけど？

そう思い、お姉さんと目を合わせる。

他の兄弟に見つからないようにするために、お姉さんの家にも僕の家にも帰れない。

だから今日は、部屋を探したり、日用品とかそろえたりしたいんだけど……。

お姉さんも目では、同意見のようだ。多分。

「この後はいろいろとあるので……」

「そこを何とか。お金出すし、泊めるし、食事つけるし」

お金という言葉に反応する僕。

今まではギリギリの生活してきたから、今の財産は5万円ほどと日本刀ぐらいだ。

それに、1日とは言え、宿泊費と食事代も浮く。

お姉さんを見ると同意見のようだ。互いに頷く。

「分かりました。一緒に乗ります」

「ありがとう」

「3人でいいんですね。じゃあこちらに乗ってください」

そうしてパトカーの後部座席に乗り込む。  
右から順に、三浦さん、お姉さん、僕だ。

「ここから何分？」

「分かりませんが、今の時間は渋滞しますからねえ。結構時間かか  
ると思いますよ」

「それじゃ、困る。サイレン鳴らして走って」

「ははっ、それは流石にだめでしょう、といたいところですが、  
僕も早く帰りたいので鳴らしときます」

……意外とサイレンが軽いノリで使われている。  
車が次々と左右に避けるさまは、えらい人が通るみたいだ。

「事情とか、着いたら聞くから」

「え？ 移動してる間に聞かなくていいんですか？」

てつきり、すぐに今回の事件の説明を求められると思ったんだけ  
ど……。

「2日寝てないから眠い。今は寝かせて」

「そういつことなら、どうぞ」

それにしても2日も寝てないで、ライラの攻撃を見切ったのか。やはり格が違う。

でもまあ、強い必要は全然ないんだけどね。

平和な世の中……とまでいかなくても、それなりに治安はいい。

「これからどうするの？」

これまで口を閉じていたお姉さんが話を切り出す。

口を閉じていたのは僕に受け答えを任せてくれたからだ。

三浦さんは見事に寝ている。

「そうですね……。とにかく部屋を探して、日用品そろえて……」

「そうじゃなくて……、その……」

「？」

いつになく歯切れが悪い。

今まで余裕を保ってきたお姉さんとは大違いだ。

「これから、私と一緒に生きてくれる？」

「いいですよ」

回答はあっさりと。

「……もう少し迷わないの？ いきなり私が一郎君のお母さんって言われて信じてるの？」

「うちの暗殺対象ターゲットっていうのは、身内から逃げ出した人も入ります。しかも、うちの身内は兄弟のほかには、父親の妻、つまりお母さんぐらいしかいません。

お姉さんが嘘をつく理由もないし、フォルテやライラはこの事実を知っていました。

だから、疑ってないです」

「でも本当のお母さんだからって、一緒にいていいかどうかは別でしょ？」

「どうやら、17年間もほったらかしにした母親が今更しやしやり出てきていいのか、と聞いているのだろう。

でも、一緒にいたい理由なんていくらでもある。

最初に普通に接してくれた人だから。

一緒にいて楽しいから。

初恋の人だから。

お母さんがいなくてさびしかったから。

これから一人で何もかもするのは、あまり自信がないから。

もつと色々あるし、言葉にするより気持ちはずつと重い。

でも、今言葉で表すならこんなところだと思う。

「もちろん、一緒にいたいですよ。性格や容姿に関してはラーメンの店主のお墨付きですし」

「あら、他人の評価を当てにするの？」

言葉にするのは恥ずかしいし、マジメに言っても伝わりづらいと思っただから、冗談を交えた。

下手な冗談だけど、お姉さんも同行することを認めてくれた。

……、とにかく明日から、大変になるなあ。

「いやいや、他人の評価は参考程度ですよ。あ、刑事さん、止まってもらっていいですか？」

「え、いいけど……、どうした？」

「ちょっとだけ買い物です。1分以内で戻ってきます」

「ああ、別に急がなくていいぞ」

その言葉を背に受け、パトカーから降りる。

そして、あるものを買ってパトカーに戻る。

「すみません、戻りました」

「いや、きにするな。じゃあ、走るぞ」

「はい、お願いします」

そう言ってパトカーは再び走り出す。  
相変わらず、サイレンは鳴ったままだ。

「そついえばお姉さん、今日は何日だと思いますか？」

「えーっと、今日は6月10日ね。それがどうかしたの？」

「何の日でしょう？」

「……………母の日？」

「正解です。というわけでカーネーションです」

買ってきたのはカーネーション。

丁度花やさんの前を通ったから、買った。

やはり、母の日といったらこれでしょう。

「…………、なんか嬉しいんだけど、一気に老けた感じがするわ」

「まあ、受け取っておいてくださいよ。親子再会記念ということだ」

「…………ありがとう。家族を捨てたときに諦めたことをやってくれて」

「いえ、お姉さんが喜んでくれたなら良かったです」

「じゃあ改めて……………、至らない母ですが、これからよろしくお願ひします」

いきなり頭を下げられた。

僕も慌てて返す。

「僕も不束者ですが、お願いします」

こうして、お姉さんの出会い……いや、母との再会は幕を下ろした。

これからお姉さんと僕が生きていることを知って、兄弟が追ってくるだろう。

それを何とか、かわしながら、逃げながら生活しなければならぬ。

それは大変だろうけど、お姉さんとなら出来そうな気がした。

これからよろしく……、母さん。

- 完 -

## 第九話 逃走の終わりと新たな生活の始まり（後書き）

これで、一応書き終わります。

思いのほか時間がかかりました。

最後のこの話は夜が遅いと親に怒られつつ執筆して、猛スピードで仕上げて、見直しすらしてないのでかなりg d g dになってると思います。時間のあるときに修正します。

一応、続話のネタは考えているのでそらが終わったら、連載は終了にしようと思ってます。

そういえば、この話は母の日企画だったんですね。

3日送れての完結。だめですね。

ちなみに番外編第一回はバレンタイン。

次は何になるんでしょうかね。

今度からの番外編は特別な日じゃない日になるかもしれませんが、  
つていうかそっちの方が可能性高いです。

ちなみにこの番外編はネタバレ要素がかなりあります。

F i r s t M i s s i o n の黒幕が誰か分かったり、T h i r d

M i s s i o n の登場人物も出てきたり。

極力伏せたんですけど、感がいい人、観察力がある人は速攻で気づきます。特に後者。登場人物少ないですし。

公開してから後悔……、ごめんなさい。

できれば本編の方も読んでいただけたら幸いです。

読んでくださった方、ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8741g/>

---

ファンタジーワールド番外編 - 訳ありのお姉さんと僕 -

2010年10月11日22時56分発行